

ボワギルベールの自由主義経済学とその思想的源泉

—ジャンセニスムとの関連をめぐって—

米田昇平（下関市立大学）

はじめに

ボワギルベール（Pierre le Pesant de Boisguilbert, 1646-1714）は、功利主義的な人間観に立って、社会を、交換を通じて相互的効用が実現される「欲求の体系」ととらえ、しかも欲求充足を求める人々の自由な活動は経済世界に内在する自律的メカニズムに導かれて、一定の秩序をもたらしようと考えた。17世紀末の時点で、すなわちケネーやスミスよりも半世紀以上も早く、「レセ・フェール」の秩序原理に基づく自由主義経済学の骨格を示してみせたのである。このような「レセ・フェール」の経済学の構想は一体どのような思想的源泉から生まれたのか。この解明によって、経済学の生成過程の研究においてこれまで（とくに日本では）あまり注目されてこなかったラインが浮き彫りにされる。

ボワギルベールの思想的源泉の一つは、17世紀後半のフランスの新思潮、すなわち人間の行動原理を利益に見だし、人間の行動を導く心理的動機に遡って自己愛という利己的情念の社会的効用に着目するジャンセニストやモラリストの功利的人間観や社会観にある。世俗の生活を生きる人々の集合的精神にみられる一定の普遍的な傾向性（エピクロス主義）への着目から功利主義の新思潮が出現し、それに棹さす形でボワギルベールの経済認識が形成されていったとも言える。原罪を背負った人間の墮落（邪悪さ）と無力さを徹底的に暴こうとするジャンセニストにあって、ピエール・ニコルやジャン・ドマは、そのように墮落した利己的情念（自己愛）に導かれる人間の社会に秩序をもたらしようものは何かを問う。さらに、ジャンセニスムに共鳴するラ・ロシュフコーなどのモラリストもまた人間心理を徹底的に解剖し、文学的筆致で人間本性における自己愛の優勢をえぐり出す¹。

この時代は「ヨーロッパ精神の危機（1680～1715年）」（ポール・アザール）の時代と呼ばれ、18世紀啓蒙における「神経の回復」（ピーター・ゲイ）を準備した時代と目されるが、世紀の転換点を彩るフランスの新たな知的潮流は、ヨーロッパ啓蒙の共通因子となって18世紀啓蒙の展開に大きな影響を及ぼしたように思える。それはまた経済学の生成・発展との関連でも重要である。啓蒙の共通の知的関心が文明化の進展による人間の生活状態の改善にあったとすれば、おのずから経済学は啓蒙の中核に位置することになるが（ジョン・ロバートソン）、この意味で、この啓蒙の共通因子は他方で経済学の共通の母胎でもあったからである²。例えば、この新思潮はボワギルベールの想源であっただけでなく、ヒュームやスミスに連なるマンデヴィルの想源でもあったことに注目すべきであろう。

¹ ラ・ロシュフコーの『箴言集』（初版1665年）冒頭の「われわれの美德は、ほとんどの場合、偽装した悪徳にすぎない」というマキシムは有名である。

² ジャン・ラフォンは「パスカル、ニコル、ラ・ロシュフコーといったジャンセニストのアウグスティヌス主義からベールやマンデヴィルのカルヴィニストのアウグスティヌス主義を経て、スミスの経済学に至る興味深い連続性が存在する」ことを指摘している。そして人間と人間との関係に関する倫理的考察からどのようにして自立的な経済学が生まれたのかを問い、「罪それ自体を普遍的善に転換するアウグスティヌス主義の不可思議な錬金術」にその解答を求めている（Lafond [1996] p.187）。ではこの「錬金術」とは一体何か。ラフォンの論文では、その秘密は結局不明なままである。

ただし、経済学の（より限定的に言えば、ボワギルベールとマンデヴィルの経済学の）共通のこの母胎の内実はいまだ十分には明らかにされていない。本報告では、その解明への第一歩として、ピエール・ニコル（Pierre Nicole, 1625-1695）をとりあげ、ニコルの「情念と秩序の哲学」の延長上で、ボワギルベールがどのような飛躍によって「レセ・フェール」の経済学の構想に至ったのか、その一端を明らかにしたい。

1. ピエール・ニコル—自己愛による秩序の可能性—

ニコルは、アダムの墮罪によって原罪を背負うことになった人間を徹底的に墮落した存在であると考えている。「墮落した人間はただ自分を愛するだけでなく、限度も節度もなく自分を愛する。…彼はあらゆる種類の財、名誉、享楽を欲し、自分のためにしか、あるいは自分とのかかわりでしかそれらを望まない。彼がすべての中心である」（1675, p.382）。自己愛（*amour-propre*）に発する暴君的な性質が人間だれもの心底に刻み込まれており、そこに「人間のあらゆる犯罪や乱脈の種が宿っている」（*ibid.*）。人間は自分を愛するのと同じ程度に他人の自己愛を憎むから、自己愛と自己愛の対立は必然である。ニコルは「人間は戦争状態で生まれ、各人はおのずからあらゆる他人の敵である」と述べたホッブズの言説は真理や経験に合致していることを認める（ただし自然権の議論は否定する）（1675, p.383）³。

しかし一方では、人間は無数の必要によってお互いに結ばれており、必然的に社会のなかで生きていかざるをえない。そしてこの必要を満たすため、墮罪以後に神がすべての人間に課した「苦役」としての労働を強いられる。しかも人間は欠乏を満たそうとして「ひたすらみずからの欲求や必要を増大させる」（1671a, p.62）から、社会的結合の必然性はますます高まり、労働に基づく人間同士の相互依存の関係が拡大していく（「あらゆる技芸は鎖で結びつけられており、お互いに必要とし合っている」1671c, p.215）。ところで、ニコルにとって、自己愛をほとんど唯一の行動原理とする人間はいわば欲求の存在であり、したがってそのような人間が織りなす社会は一面では欲求の社会として特徴づけられる。「世界全体はわれわれの都市」であり、この世界の住民は「皆、お互いに有する相互的な諸欲求（*les besoins reciproques*）を通じてすべての人々をお互いに結びつける連鎖の一部となる」（1671b, p.110）。こうして、労働に基づく相互依存の関係を拡大していく動因は、人間の自己愛に発する諸欲求であった。ここに功利主義の人間観と社会観の先駆けをみることができよう。また、ここにみられる苦役としての労働が欲求の社会を支えるという構図は、ヨーロッパ出自の（とくに効用理論に立脚した）経済学の重要な特徴をなすものであることは言うまでもない。快樂の享受を求めて苦痛に耐えるという逆説的な人間のあり方が、いち早くジャンセニストによって確認されたのである。

このように一方で対立し合いながら、他方で相互依存を深めていく。そのようなあり方が一体どのようにして可能なのか、言い換えれば、自己愛を秩序へと向かわせるための抑

³ ニコルへのホッブズの影響は明らかである。一方、ジョン・ロックは、ニコルの『道徳論集』のいくつかの論説を英訳し紹介している（Yolton [2000] を参照）。またマンデヴィルは『蜂の寓話』に先駆けて、モラリストであるラ・フォンテーヌの『寓話』の一部を英訳・出版（1703年）した。マンデヴィルに多大な影響を与えたピエール・ベールを含めて、この「ヨーロッパ精神の危機」の時代におけるインターナショナルな「学問共和国」の思想的カオスに、経済学の生成という新たな視点から光を当てる必要がある。

制装置とは何か、これこそがニコル道徳論の最大の問題であった。抑制要因の一つは「利益への配慮」である。「相互的な諸欲求を通じて」人々が関係を結ぶこの世界において、自己愛を満たすためには、他人の自己愛を抑圧するのではなく、それを満たしてやるのが最良の方法であると彼は言う。「人は得るために与える」、それが、人間同士が行うあらゆる交際・交流 (commerce) の基本であり、これによって愛徳 (charité) が関与しなくてもあらゆる必需品が満たされ、聖人君子ばかりの国と同じように安全かつ快適に暮らすことができる (1675, p.384)。このように利益への配慮が自己愛に歯止めをかける。言い換えれば、愛徳に代わって貪欲が「あまり誉められない仕方」で相互依存関係を維持するのである。ニコルはスミスを思わせる言い方で次のように述べている。「田舎に行けばほとんどどこでも喜んで旅人の面倒をみる者や、また旅人を迎えるための宿舎を準備万端整えている者たちをみかけることができる。旅人は好きなようにそれを使うことができるし、彼らは注文通りに従う、…愛徳の精神によって動かされているのだとすれば、これほど素晴らしい人々がほかにいようか。しかし、彼らを動かしているのは貪欲 (la cupidité) である」 (1671c, p.213)。ニコルはまた「貪欲によって形成されるこの精神世界」における自己拡張の情念の機能に関して、デカルト力学の渦巻き理論を応用し、自然的諸力がその相互の圧力によって安定状態に達するように、諸情念はその競合関係ないし相互牽制を通じて一定の秩序を維持しようと述べている (1675, p.386)。このように「利益による秩序」の構想は他方で機械論的世界観によって支えられていた。

ニコルはさらに、人々の愛や称賛や敬意を得たいという自己愛に発する情念が、他人の反感や憎悪を引き起こしかねないような自己愛の強い発露を抑制しうることに注目する。すなわち自己愛はみずから向けられた悪意、悪感情、憎悪によって苦痛を感じるのを避けようとし (自己愛の剥きだしの行動が「他人の心に与えるはずの結果を考えるに至ったとき、人はただちにそれらを隠すという結論を下す」 1675, p.402)、むしろ人々の敬意や友情を獲得しようとして、愛徳を模倣する。このような自己愛の隠蔽・抑制装置が「礼節 (honnêteté)」であり、自己愛は「礼節」を通じて愛徳を偽装し、人々の愛や敬意を獲得しようとする。他者の眼差しへの意識が、愛徳を思わせる礼節を人々に強い、剥きだしの自己愛にブレーキをかけるのである。こうして自己愛と愛徳は外見上、一致する、あるいは見分けがつかない (「愛徳と自己愛は結果において同じである」 1675, p.381)。

以上のように、「利益への配慮」と「愛されたいという願望」はいずれも自己愛に発する情念であるが、これらが他の暴君的な自己愛の発露を抑制し、欲求の社会に一定の秩序をもたらす。ただし、そうであるためには、その自己愛は真の利益がどこにあるかを見抜き、理性によってそれを実現することのできる「開明的な自己愛 (amour-propre éclairé)」 (1675, p.408) でなければならない (情念による理性の利用)。したがって、「規律正しい社会」を作るためには誰もが開明的な自己愛を身につける必要があるが、しかしこのことは何ら保証されていない。例えば、他人の眼差しなど一切気にしない人々にはその振る舞いを押しとどめるブレーキが存在しないから、彼らはあらゆる気まぐれや奇行を繰り返すが、これほど危険な人々はいない。それゆえ、結局、上記の二つの歯止めでは十分ではない。そこでニコルは、「苦痛の恐れによって貪欲を抑止し、社会に有用な事物に貪欲を向かわせる政治的秩序」 (1671c, p.214) が必要であると明言する。法を定め、その違反者を「車刑や絞

首刑」で罰することのできる政治的秩序である。したがって、結局、「死の恐怖が市民社会の第一の絆であり、自己愛の第一の歯止めである」(1675, p.384) ことになる。この歯止めは力づくのものであり、しかも政治的秩序の担い手である高位高官たちは神の意志をそこに反映させることを求められるから、この意味で政治的秩序は神の意志に直接、結びついている(神から受け取るこれほどの財について「人々は神に感謝すべきであり、その感謝のなかに、彼らにそれらの財をもたらすために神が利用する人々や神の権威の受託者である人々を含めなければならない」1671c, p.217)。

このようにニコルは、自己愛の自己規制の原理を探求し、「利益による秩序」の可能性を見いだしたが、しかし罪深い人間の心底に刻まれた自己愛という悪が公共善へ転化するのを最終的に保証しうるものは、彼にとっては、為政者が神慮に基づいて案出し維持する力づくの政治的秩序のほかにはない。こうして、ここでは便宜を求めてやまない人間の功利的行動は、宗教・政治の規範にしっかりと繋ぎとめられていたのである。

2. ボワギルベール—レセ・フェールの経済学—

ボワギルベールが立脚する地点も功利主義の人間観と社会観である。「だれでも豊かになりたいと思う。大部分の人が昼夜を問わず働くのは、ひたすら豊かになりたいがためである。…富の獲得については過度によって罪を犯すことなどありえず、…他人の利益への配慮などまったくの幻想であるか、空論の域を出ない宗教の考えることである」(1707b, p.973)。では富とは何か。貨幣を富とみなす俗論を厳しく批判しつつ、彼は、人間の欲求を満たし快楽を増大しうるものは何であれ富であり、喜劇役者が提供する娯楽でさえ生活を彩る富である、としている。人間は欲求の存在であり、その織りなす社会は人間同士が利益によって結ばれた欲求の社会であるほかない。彼は明らかにニコルの言説を踏まえ、「世の中のあらゆる取引は…もっぱら企業家の私欲 (*l'intérêt*) によって支配されている。…旅人にぶどう酒を売る居酒屋は、だれであれ旅人の役に立とうとしたのでは決してなかった、自分の蓄えがなくなりはしないかと心配しながら旅の足をそこにとどめる旅人にしても事情は同じである。世界の調和をもたらす国家を維持するのは、このような相互的効用 (*cette utilité réciproque*) である。各人は自分の個人的利益をできるだけ多く、そしてできるだけ容易に手に入れようとする」(1705, p.748-9) と述べている⁴。

このように、ボワギルベールは宗教の羈絆を逃れ、ニコル(やジャン・ドマ)の功利主義的な社会認識をいっそう徹底して、文明社会を、交換を通じて相互的効用が実現される「欲求の体系」と捉えた。もっとも、その人間観にはジャンセニスムのリゴリズム(あるいは原罪の思想)が投影している。彼は人間の欲求が次第に高いレベルで充足されていく文明化の過程を、一方では人間の墮落が深化する過程と捉えるからである。人々が必需品に続いて華美で余分なものを欲するようになったのは、「腐敗、暴力、逸楽」が現れてからのことであり(1707a, p.888)、富の種類を増やし文明化を進めるものは、「精神の墮落」にほかならない。いうまでもなく、この見方はマンデヴィルの逆説的議論(私悪は公益)と

⁴ ペローは、スミスの「われわれが自分たちの食事をとるのは、…」という有名なフレーズの源泉を上述のニコルの一文に見いだしている。すなわち、社会的な結合原理を利益にみる見方に関して、スミスとボワギルベールの想源は同じであると考えている (Perrot [1984] pp.333-354)。

類似している。そして一方では、それは、しばらくのちの「商業の精神」を手放しで称揚するムロンなどとは大いに異なるところである⁵。

「精神の墮落」に導かれて、人は次第に必要な性の低い財を求めるようになるから、職業についても、パン屋や仕立屋のようなもっとも必要な職業から、奢侈の最後の産物であり過度の余剰の存在を示す喜劇役者に至るまで、順次、世の中に登場することになる。この意味で文明社会はより高次の欲求充足に向けて、いわば序列化された「欲求の体系」として形成されていく。この体系は生産の部面でみれば相互依存関係によって特徴づけられる。ニコルは「あらゆる技芸は鎖で結びつけられており、お互いに必要とし合っている」と述べたが、ボワギルベールは「あらゆる職業は全体として数々の輪によって構成される富裕の連鎖 (une chaîne d'opulence) をなしており、一つでも輪がはずれてしまえば全体が無効になる」(1704,p.830) と述べている。「富裕の連鎖」は生産者同士の相互依存を意味するが、他方で地主などの有閑者と生産者も相互に依存し合っている。そしてこれらの相互依存を維持する条件は、お互いの過不足を調整するあらゆるレベルの交換関係 (commerce) の円滑な機能である。自然的秩序の観念と結び合って彼をレセ・フェールの主張へと導いたのも、このような認識であった (commerce の自由)。彼が多用する「釣合」や「均衡」の概念もまた過不足を調整するための持続的な交換という不断の運動状態を意味しており (デカルトの渦巻き)、富や「一般的富裕」はこのようなダイナミックな調整過程を通じて実現されていく。

彼はこの相互依存を貨幣循環ないし消費購買力の循環 (所得の循環) の側面から分析し、それが基本的に循環的・因果的な関係であることを明らかにしつつ、その関係の拡大と縮小の条件を示している。例えば、縮小をもたらす要因は地主が手にする土地所得の減少である。その影響は波及的に全体に及び、土地所得の減少を契機として経済は螺旋的な収縮過程をたどって「もときた道を逆行していく」(1704, p.838)。この相互依存の拡大をもたらした動因は「精神の墮落」あるいは「快樂 (la volupté)」(1707b, p.986) であったが、そのプロセスを主導した地主の所得が減少すれば消費循環は波及的に縮小を余儀なくされる。ニコルのいう「相互的な諸欲求を通じて」お互いに結びついた連鎖は、消費欲求の収縮とともに縮小していくのである。ところで、土地所得の減少をもたらすのは穀物価格の低落である。言い換えれば、釣合や均衡を維持する条件は何より穀物価格を安定的に維持すること、すなわち穀物価格が生産費との関係で、また他の財価格との関係で「比例価格 (un prix de proportion)」を維持することであった。

しかしこの「比例価格」の実現は容易ではない。なぜなら、この経済世界では「みずからの幸福をこうした調和の維持に期待するほかないのに、恐るべき魂の墮落によって朝から晩までそれを破壊しようとして全力を尽くさない者などだれもない」(1707a, p.891) からである。では、これほど強く自己愛に支配されたこの世界で、その実現を保証しうるものは何か。彼はいう、「これらの場合に正義が維持されるのは剣の切っ先によるほかない。

⁵ 人間の悪が結果的に公共善をもたらすという逆説に含まれていた彼らのシニシズムは、ムロンやフォルボネなどの経済論説では、文明の晴れやかな展望を前にしてすっかり影を潜める。ここでは個人的利益の追求は人間の悪に根ざすどころか、世俗的幸福を目指す功利的人間の、自己実現へのまっとうな願望に基づくものとみなされることになる。

自然や神慮 (Providence) が引き受けるのもその役割である。…自然の働きに任せる (*on laisse faire la nature*) かぎり、…このような秩序が維持される」(1707a, pp.891-2)。「自然の働き」とは、市場において人々の「利益の願望」がおのずから均衡やバランス (比例価格) をもたらすことである (1707b, p.992)。彼は需要の価格弾力性の観点から小麦市場と小麦以外の財市場とを区別し、さらに需要や供給の強度 (「買う必要」と「売る必要」) に着目しつつ売り手と買い手の両面的競争が均衡を導くことを示すなど、興味深い価格理論を展開したが、価格形成のメカニズムそれ自体は詳細には論じなかった。しかし彼が、自然あるいは神慮という名の市場の強制力によって、利益を求める個々人の利己的情念が相互に調整され、比例価格の成立に至る何らかの自己調整作用の存在を想定していたことは間違いない。人為を排除し「自然だけが設けることのできる必然的な秩序」に任せておけば、交換における「正義のルール」が遵守される。そしてこのような秩序形成の原動力は人々の「豊かさ」や「利益」の願望であり、利己的情念の自由な運動にほかならない。彼はいう、「だれでも日夜、個人的利益によってみずからを維持する。そしてだれもほとんど考え及ばぬことだが、そうすると同時に一般的利益を形成する」(1707b, p.991)。このように彼の自由主義の主張は、彼なりの「自然的自由の体系」の構想によって根拠づけられていたのである⁶。

自己愛という罪を (公共) 善に転換する不可思議な「錬金術」(ジャン・ラフォン) を施すのは神慮にほかならないが、ボワギルベールにとってこの超越的な神慮は、しかし不可知ではない。その内実は、社会的結合システムとしての循環的相互依存のシステムに内在する、市場の強制力という利己的情念 (自己愛) の対立を調整しうる安定化装置のことであり、分析可能な対象であった。こうして、自己愛が紡ぎ出す自律的な経済秩序への着目によって、彼は (自由主義) 経済学の形成に向けて前例のない大きな一歩を印したのである⁷。

(引用文献一覧などの資料は当日配布)

⁶ このような自律的な経済秩序への着目は、封建的な政治的、社会的諸制度の存在理由を奪うばかりか、政治それ自体の領域をも大幅に縮小してしまう。ファッカレロはいう、「…国王および国王がその頂点に位置するヒエラルキーが社会的紐帯を形成することはもはやない。…ニコルにおなじみの『政治的秩序』や『こまごまとしたあらゆる人間的絆』も、絶えず必要であっても遠くにぼやけている。経済秩序こそ何より重要であった」(Faccarello [1986] p.158)。コーヘンもまた「ボワギルベールは、もっとも慈愛に満ちた全知の権力者の力をもってしても、普通の人間が利己的かつ盲目的に自己利益を追求することでみずからのためになしうることを、彼らのためになしえないと主張することで、絶対主義の基礎を掘り崩した」(Keohane [1980] pp.356-7) と述べている。ただし、このような観念的な自由主義の主張は、絶対王政の基盤がまだ強固な状況において、現実の社会的・政治的諸制度に由来する様々な攪乱要因との矛盾に直面せざるをえない (詳しくは米田 [2005] の第1章「ボワギルベールの自由主義経済学—欲求と秩序—を参照)。

⁷ 以上にみてきたニコルからボワギルベールへと至るラインは、功利主義に立脚した経済学、言い換えれば、「効用」や消費欲求への着目を特徴とする経済学の形成を典型的に示すものである。フランスでは、その特徴はこれ以降もムロンやフォルボネなどによって受け継がれていく。マンデヴィル以降のイギリスの展開はどうであったか。マンデヴィルが問題提起して始まった奢侈論争の成り行きを含めて、英仏の対照はおおいに興味深い。ところで、自己愛という悪が公共善に転化するとは、自己愛が社会的に有用な結果をもたらす社会の繁栄に結びつくことである。この転化を可能にするのがベールに包まれたままの神慮であれ、あるいは事実上の市場機構のことであれ、いずれにせよ、そのような認識の前提は、人々の集合的精神として、「効用」の増大や経済的繁栄を善とする価値観が醸成されていることである。上記のラインの歴史的意義をいっそう明確にするためには、功利主義を育んだ、このような価値規範の世俗化の有り様を同時に検討する必要がある。今後の課題である。